フォールアウト4　二人の生存者

バケツ頭　小説もどき家

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フォールアウト小説もどき。

【リジー】

サンクチュアリの住民。ｖａｕｌｔｌｌｌで冷凍保存され、二百年間眠っていた。不思議な力の持ち主。

【ネイト】

リジーの夫。アンカレッジの英雄。

【プレストン・ガービー】

入植者の一団を率いるミニッツメンの生き残り。

【コズワース】

アップルトン家の家事ロボット。

目次

序章　戦前
崩れる世界 ―― 1
覚悟 ―― 15
第一章
脱出 ―― 18
ドッグミート ―― 29
コンコード ―― 35
助け ―― 38
前を向いて ―― 49
遺した者、残された者 ―― 57
希望 ―― 64
第二章
再建への第一歩 ―― 70
団結か死か ―― 74
状況 ―― 82

序章　戦前
崩れる世界

　中国軍の反転攻勢作戦は失敗した。投入された歩兵と機甲部隊はパワーアーマー部隊と米軍歩兵の奮闘によって撃退され、劣勢だったアラスカの中国軍はより追い込まれた。

　アラスカの中国軍は劣勢で中国本土も米軍の侵攻を受けている。終戦は近い。中国軍の大幅な弱体化により、米軍司令部は戦闘部隊の一部に休息を与える事を決定。前線に縛られていた戦闘部隊は塹壕を交代部隊に託し、本土へと帰還した。まるでクリスマスプレゼントのようなサプライズに兵士と兵士の家族友人達は歓喜した。

「もうどこにも行かないよ」

　戦場から帰って来たネイト・アップルトンは次に戦場に行くのはいつかと不安げに聞く妻にそう答えた。

　パープルハート勲章二回にブロンズスターメダル一回、殊勲章一回。これだけ勲章を授与されれば親や友人に自慢できる。次のパープルハート勲章が与えられるときは自

分が戦死した後だろう。

ネイトは英雄になりたくて軍に入ったわけでも、アーリントン国立墓地に埋葬されたい訳でもなかった。

今、彼にとって大事なのは家族や妻リジー、そして幼い息子ショーン。ただそれだけだった。

友人の中には冗談交じりに「こんな先の見えない世界で子供を作るなんて残酷」と言う者もいたが、将来を悲観しても何も始まらない。物資不足や内戦の不安はあるが、世界が滅ぶと決まった訳じゃない。きっと道は拓ける。ネイトとリジーはそう信じてショーンを育てた。

アラスカから中国軍が撤退した時、ネイトを含めたアメリカ国民は勝利が近いと喜んだ。戦友や家族の犠牲と勇気、それから忍耐がついに報われると。

彼らは知らなかった。勝利の日など永遠に来ない事を。

彼らの多くはもうじき平和な日常が戻ってくると信じていた。石油プラントに拠点を築いた一部の有力者達と違って。

◇◇◇◇

朝7時。ここに暮らすリジー・アップルトンは、鳥の鳴き声で目が覚めた。彼女の隣には夫であるネイトがぐっすり寝ている。

（おはよう、寝坊助さん）

リジーは彼にキスをすると、ベッドから起き上がり、浴室に向かった。

シャワーから流れる冷水とシャンプーのミントの香りが眠っている頭を起こしてくれる。私服であるチェック柄のシャツとジーンズに着替え、歯磨きを終えるとリジーは子供部屋にいる息子のショーンを覗いた。

「ふふっ　可愛い寝顔ね」

息子はベビーベッドの中でよく眠っていた。天使が寝ているのを確認した彼女はリビングへと向かった。

「ふーん、ふふーん」

リビングでは、コズワースが既に家事を行っていた。ロボットの朝は早い。彼はリジーに気がつくと下手な歌をやめ、視覚センサーの絞りを細めた。

「おはようございます！　奥様！」

「おはよう」リジーはコズワースに微笑んだ。

「おはようございます！　奥様。今日も良い天気ですね！」

「ええ、そうね。新聞とネイトが頼ん――」
「新聞とコミックならカウンターに置いてあります！」
「流石」リジーは笑みを浮かべ、働き者のロボットを褒めた。
キッチン前のカウンターにはハブリスコミック社が出版しているグロッグナック・ザ・バーバリアンと新聞が置いてあった。
リジーは新聞を手に取った。
新聞の見出しはエディー・ウィンターの件についてだった。記事には彼の捜査が公式に終了した事が書かれている。
エディー・ウィンター。彼は多くの者を殺した極悪人だ。リジーは他の法の執行者と同じようにエディー・ウィンターほど電気椅子がふさわしい男は居ないと思っていた。それが今や「法的に無罪」の人物で連邦捜査局の協力者である。
（悪党がまた野放しか。ボストン市警は悔しいでしょうね……バレンタイン警部は特に）
「さぁ、奥様コーヒーが出来ました」
「ありがとう」リジーはコズワースからコーヒーを受け取り、一口啜った。
甘く、苦味がない。

コズワースはコーヒーの好みを理解できない。口で何度も「ブラック」と言っても、彼はシュガーボムのように大量の砂糖を入れなきゃ気が済まないらしい。「自分で淹れる」と言ったら激しく憤慨するのだ。

言葉で分からなかったら彼のパラメータを弄る必要がある。修理からコンピューターが戻ってきたらさっそく取り掛かろう。趣味で学んだプログラミングの技術を活かすときがきた。

無機質の家族が夫にコーヒーを淹れる前に別のタスクを与える必要がある。

「ねえ、コズワース。朝食の準備は私がやるから、貴方は芝刈りをお願い。……昨日みたらまた伸びてたのよ」

「はい、奥様。直ぐに取りかかります」

「頼んだわよ」

コズワースはアームで敬礼すると、外に出ていった。

「あら？　こんなところにタバコが」

リジーは棚の上に置かれたタバコの箱を手に取った。ネイトとリジーはタバコを一度も吸ったことが無い。

「誰のだろう？　あ……お義父さんのか」

昨日、義両親にショーンをお披露目した事をリジーは思い出した。何時もの癖でタバコを吸おうとした義父を義母が叱る様子がおかしくて、ネイトとクスクスと笑った事も。

（今度あった時に渡そっと）

リジーは朝食の準備をした。準備と言ってもパンをトースターに入れ、フライパンで卵を焼くだけなのだが。

朝食の準備をしていると、ネイトがあくびをしながらやってきた。

「おはよう」

「ふぁ……おはよう……ふぁ～眠い……」

「ふふっ　顔を洗って目を覚ましてきて。貴方が顔を洗う頃には朝食の準備を終えておくから」

「ふぁかった《わかった》」

ネイトは大きなあくびをし、浴室へと向かった。

リジーは、朝が弱いネイトを見て笑った。学生時代の旅行、それに初めてのデート。小学校時代から彼は朝が弱く、リジーと同居する前は大事な行事にすべて遅れてきたのだ。リジーと彼女の〝教育〟がなければ、ネイトはアンカレッジの英雄どころか軍の会計課にすら入れなかっただろう。

出来上がったスクランブルエッグを皿に盛りつけると、リジーはネイトの為にコーヒーを淹れた。

粉ミルク一杯、砂糖はいれず、コーヒーはスプーン三杯。それがネイト好みのコーヒーだ。コズワースには理解できなくても。

コーヒー、料理、グロッグナック・ザ・バーバリアン。リジーはそれらをテーブルに置くと、席について自分のコーヒーを飲みながらネイトを待つ。

数分後、シャンプーの香りを漂わせながらネイトがリビングに入ってきた。

「今度こそおはよう」

「おはよう」と、リジーはマグカップを両手に持ち笑みを浮かべた。「さっぱりした？」

「ああ、もう気分爽快さ」と言うと、ネイトは席に座りコーヒーを飲んだ。「うん、美味い」

「良かった」リジーはコーヒーを飲み、グロッグナック・ザ・バーバリアンをネイトに差し出した。「最新刊が届いてたわよ」

「お！　スピーチから帰ってきたら早速、読むとしよう」

「貴方、ホントそのシリーズが好きね。今度、私も一緒に読もうかな」

「ああ、きっと気に入るぞ」ネイトは嬉しそうに笑い、パンを一口かじった。

食事が終わる頃、庭仕事を終えたコズワースが家に帰ってきた。
「お疲れ様、コズワース」と、リジー。
「ご苦労」と、ネイトは仕事を終えた無機質の家族を労った。
「芝は刈ってくれた？」
「ええ、奥様。それよりも!!」コズワースは声を荒げ、電動ノコギリについたガムをリジーとネイトに見せた。「また庭にガムが捨ててありました！　今月で２回目です！こんな事する人がいるなんて許せない！」
「ネイト……」
リジーは呆れ笑いを浮かべ、ネイトを見つめた。
「おいおい、そんな目で見るな。俺じゃない」
「奥様、旦那様！　犯人は分かってるんです！　犯人はローザさんの息子さんです！あのイタズラ好きのかわいい少年です！」
「コズワース、正直に言え」ネイトが言った。
「彼は悪魔です!!」
〈ショーンが泣く声〉
「あ、ショーンが」
「俺が行ってくる」ネイトは立ち上がろうとするリジーを止めた。「お前は〝怒れるロ

ボット執事〟を頼む」
「ええ」
　リジーは子供部屋に向かうネイトを見送った。
　コズワースはショーンを泣かせてしまった事がショックなのか視覚センサーを下に向けている。
「コズワース、あんまり大きい声で怒鳴らないでよ。うちには赤ちゃんが居るんだから」
「……申し訳ありません奥様……食器を片付けます」
「ええ、お願いね」と、落ち込むコズワースにリジーは愛想良く微笑んだ。「私も天使ちゃんの様子を見てこよっと」
　リジーが子供部屋に行こうとすると、玄関のブザーが鳴った。
「依頼人かしら？　それともまた、セールスかな？」
　リジーは髪を軽く整え、玄関のドアを開けた。
「はーい――」
「どうも、おはようございます！」
　黄色のスーツに帽子。外に立っていた男は帽子をちょこっと外して挨拶した。彼は愛想の良い胡散臭い笑顔をリジーに振りまいた。
「あー……おはようございます」リジーは玄関を開けた事を心で後悔しながら挨拶を返

した。「何の御用ですか？」
「はい！　私はとても重要な案件をお客様にお伝えしに参ったのです！」
（間違いない。セールスね……）
「お客様ねぇ……。あの、申し訳無いですがセールスは全てお断りしてるんです」
「ハハハ、いえ、いえ！　私はセールスではございません。……ハハハ、奥様もご冗談がお上手で！……ごほん。それにお忙しいのは分かっていますからお手間は取らせません。ほら、時は金なりってね」
　リジーは男の笑顔に顔をしかめた。とても胡散臭い。
「……本日伺ったのはこの国に奉仕されていたご主人とご家族方には、お近くのＶＡＵＬＴ……ＶＡＵＬＴ１１１の優先入居権がある事をお伝えする為です」
「ＶＡＵＬＴ１１１？　ここの近くの？」
「その通りです！」
「私達がそこの入居者に選ばれたの？」
「イエス！　まあ、厳密には今からお渡しする書類に必要事項をご記入頂ければですが」
　そう言って彼は一枚の紙が挟まったクリップボードをリジーに渡した
「これにお書き頂ければ今日、世界が滅んでも貴女方は安全なＶＡＵＬＴに入る事が可能です！」

――まぁ、書けば帰るでしょう……。
「……分かりました、書きましょう。あ、ペンを貸してくれますか」
「はい、どうぞ」男は青いＶＡＵＬＴ―ＴＥＣ社の青いペンをリジーに渡した。「差し上げます。サービスです」
「どうも。夫も呼んでくる？　記入欄には家族全員の欄があるけど？」
「奥様が分かっているなら奥様がお書きになって構いませんよ」
「そう」
ネイト・アップルトン。２５歳。エンジニア。
リジー・アップルトン。２５歳。探偵。
名前、年齢、職業。リジーは記入欄を素早く埋めた。
彼女は記入欄を埋め終わると男に返した。
男は帽子をもう一度取って笑顔で「さようなら、良い一日を」と、言って去っていった。
セールスマンが帰ると、リジーは子供部屋に向かった。
「いないいないばぁー」
子供部屋ではネイトがベッドに寝っ転がっているショーンをあやしていた。
ベビーメリーが出す音楽が優しく室内に響いている。

「ネイト、天使ちゃんは泣き止んだ？」

リジーはネイトの隣に立ち、ショーンを覗いた。ショーンは泣き止んでおり、笑っている。

「あら、すっかりご機嫌ね」

「ああ、ベビーメリーを回したらこの通り」

「ふふっ　お義母さんから貰ったベビーメリーはショーンに効果てきめんね。流石、赤ちゃんの頃のネイトを泣き止ませただけの事はあるわ」

「おい、俺は泣いた事なんて一度も無いぞ？」

「ふふっ　嘘よ。赤ちゃんで泣かない人なんていないわ。それに私は小さい頃から貴方を知ってるのよ？　貴方が泣いてる所なんて数百は見てきたわ」

「ハハッ　数百は大げさだろ？」

「いいえ、大げさじゃないわ。貴方は涙もろいのよ。先週も映画を観て泣いてたじゃない」

「あ、あれはゴミが入っただけだよ」ネイトは恥ずかしそうに笑った。「……ところでお客さんは誰だった？」

「ＶＡＵＬＴ―ＴＥＣの人だったわ。何でも私達にはシェルターの入居権があるんですって。無料だったからササッと登録しといたわ……良かったわよね？」

「ああ、構わないよ。この選択が俺達の命運を分ける事になるかもしれないしな」
「そんな状況は来てほしくないけどね」
「まったくだな」

「奥様！　旦那様！」と、コズワースの声。「こっちにいらしてください！」
「コズワース？」
　コズワースの緊迫した声にリジーとネイトは顔を見合わせた。リジーはショーンを抱いて、ネイトと共にリビングへと向かった。
「コズワース、どうしたの？」
「お二人ともテレビをご覧になって下さい」
　コズワースはリビングのテレビをアームで指した。テレビではキャスターが暗い表情でニュースを読み上げている。
〈続いて……ええ……、閃光があったとの報告が。目も眩む閃光とのこと。大爆発の音……確認を……確認を取っているところです〉
「何があったの……？」リジーはテレビを観ながら不安げに呟き、ネイトに寄り添った。
〈どうやら現地支局との連絡が完全に取れなくなった模様です……〈新しい情報だ、マイク！〉　い、今……確認の報告が……入ってきました。ニュ、ニューヨークとペンシルバ

ニアで核爆発を確認したとの報告が入ってきました……〉
「そんな！」と、リジー。
「今すぐＶＡＵＬＴへ行くぞ！　早く！」
「え、ええ！」
（こんなことって……）
　リジーはネイトに頷き、家を飛び出そうとした。
　しかし、彼女はコズワースの事が気掛かりで、玄関の前で後ろを振り返る。
「コズワース、貴方……――」
「早く行ってください、奥様！」
「でも、貴方は……」
「私はロボット、ご心配には及びません！　今はお二人の命とショーン坊っちゃんの事だけを考えて下さい！」
「コズワース……」
（無事でいてね）リジーはコズワースを一瞬見たあと、ネイトと共にＶＡＵＬＴへ向かった。
「……奥様、旦那様お仕えできて光栄でした」

覚悟

南ボストン郊外の道路は検問の為、多くの車両で混雑していた。
ネイトの両親、ウォルターとマーサー。二人は結婚２８周年の記念日をボストン市内の高級ホテルで祝うのをとても楽しみにしていた。

「昨日のショーンちゃんはとても可愛かったわね、貴方」
「うん、赤ちゃんの頃のネイトとそっくりで、びっくりしたよ」
「ふふ　ホントね。――それにしても私達は本当に幸せ者ね。リジーちゃんという良い娘が息子の嫁に来てくれて、孫まで見せてくれるなんて」
「そうだね」と、ウォルターは優しく微笑んだ。「私達はネイト達を見守……――」
突然ビープ音がラジオから流れた。
〈攻撃警報発令。繰り返します。攻撃警報発令。これは緊急行動通知です〉
ウォルターは車を脇に停め、ラジオに耳をすませた。マーサは夫の手を握る。
〈全放送局は緊急行動メッセージｎｏ．２レッドカードを放送します。本放送局は米国政府の要請により、通常番組を中断し、緊急放送システムに参加――〉

録音されたラジオ音声。外でサイレンが鳴った。訓練ではないようだ。
「外に出よう！」
「え、ええ！」
ウォルターとマーサは外に出た。
外はサイレンと核攻撃が迫っている事を知らせるアナウンスが響いていた。
大勢の者達が車から降りて、逃げ惑っている。
ウォルターとマーサーは途中まで避難民達についていった。地下鉄かそれに準ずる場所に逃げ込もうと考えたのだ。しかし、混乱と騒乱がそれを不可能にした。
「俺が先だ！」
「押さないで！　お腹に赤ちゃんがいるのよ！　きゃあ!!」
我先にと人を押し退ける者、倒されて人々に踏み潰される妊婦。群集はパニックになり、人の心を失っていた。
暴徒と州兵との銃撃も始まり、事態は更に混乱した。
ウォルターは地下鉄への避難を諦めた。
「こっちだ！」彼は妻の手を握り、道路から外れた平原へと走った。
「あっ！」
道路を外れ、しばらく走った二人。しかし、マーサが転んでしまう。

「マーサ!」ウォルターは急いで彼女に駆け寄った。「立てるかい?」
「……ダメ」マーサの右足は捻挫しており、例え立てても走る事はできないだろう。「貴方……私を置いて先に行って」
「何を馬鹿な。そんな事できるわけない」と、ウォルターはマーサの隣に座った。
「でも……」
「私達は何時も一緒だよ。結婚したときそう誓っただろ?」
「貴方……」マーサの目から涙が落ちた。「ごめんなさい」
「いいんだよ……マーサいいんだ」
　遠くできのこ雲が昇る。、ウォルターは妻を抱き締めた。
「天に召します我らが神……――」

第一章
脱出

《手動オーバーライドを確認。冷凍睡眠を停止します》

ＶＡＵＬＴ１１１内に警告音が鳴り響き、居住者の冷凍睡眠が解除されていく。

ＶＡＵＬＴに避難し、冷凍睡眠されていたリジーとネイトはゆっくりと目を開けた。

目覚めた彼らの前にリボルバーを手に持った一人の剥げた男と防護スーツに身を包んだ女が立った。

「……こいつね」

防護スーツの女がリジーとショーンが入っているポットを指差した。

「おい！。リジー達に何をするつもりだ！」

向かいのポットに居るネイトは窓を必死に叩いた。必死に叫ぶが、彼らはまるで聞こえていないかの様にリジーのポットの扉を開けた。

リジーは、驚いた表情で謎の男達を見た。「あなた達は一体……ちょっと！」

防護スーツの女は無理やりリジーからショーンを引き離した。

「離して！」

リジーは息子を取り返そうとポットから出ようとした。
男はリボルバーを突きつける。
「動くんじゃない…」男は静かにそう言った。
（ショーンは渡さない！）
声に出そうとしたが、言葉にならなかった。口に出してはいけない気持ちになったのだ。
禿頭の男はリボルバーをしまってニヤリと笑った。
「よし、良い子だ……撤収するぞ」
リジーのポットは再び閉じられた。
彼女はポットの窓からネイトの方を見た。
「貴方…息子を守れなくてごめんなさい…」
《冷凍睡眠再開……3……2……1》
「おい！息子を返せ！…息子を……――」
ネイトの叫びも虚しく再びリジー達は冷凍され、彼らは深い眠りへと入っていった。
眠りに落ちる瞬間、リジーは義両親と自分の両親を見た。皆、優しい笑顔で彼女を見つめており、リジーは安心感に包まれた。

◇◇◇◇

《冷却アレイに致命的な故障…冷凍睡眠を停止します》
「……ショーン」
リジーとネイトは再び目を覚ました。２人のポットの扉が開く。ネイト達は床につまずきながらも立ち上がった。
ネイトはリジーの元へ駆け寄った。
「リジー、無事か？」
「……ええ。あなた、ごめんなさい……私、ショーンを」
「君が悪いんじゃないさ……リジー。今はここから出てショーンを見つけよう。さぁ、立って」
と、ネイトが言うと、リジーは涙を拭き、ネイトの手を掴んで立ち上がった。
「二人でショーンを取り戻そう。……俺達の子を」
「……ええ、あなた」
二人は立ち上がり、ショーンを取り戻す決意を胸にＶＡＵＬＴの通路を進んだ。

食堂エリアに続く扉をネイトが開けると部屋の奥から異様にデカイ、ローチがネイト達の元に近づいてきた。

――カサカサ。

「でか過ぎるだろ…」

「こっちに来るわ！」

「……仕方ない……く！」ネイトは思いっきりローチを足で踏みつぶした。ローチの汁が彼にかかる。「よし…殺したな……さぁリジーこっちに…」

ネイトはリジーに手を伸ばした。しかし、リジーは身を縮めてネイトの手を握る事を拒否した。

「リジー？」

「近づかないで！」夫の服にびっしりとローチの汁がついておりリジーは思わず声をあげてしまった。

「……いこう」

「……あ、ごめんなさい貴方。これは、違うの……これは」

「……いいんだ……先に進もう」

リジーに避けられた彼は寂しそうな顔で先の通路に進んだ。心なしか彼の後ろ姿には悲壮感が漂っている。

「本当にごめんなさい……」
リジーは罪悪感を懐きながらも距離をとって彼の後に続いた。
ネイトは原子炉チャンバーを抜けて通路の扉を開けると数匹のローチが這いずり回ってるのを発見した。
「また、ローチかよ……」ネイトは後ろを振り向いた。「リジー、扉を閉めてここにいろ」
「……ええ、あなた気をつけて」
「まかせろ」
ネイトは通路に一人で入っていき、ローチ達の駆除に取り掛かった。
グチャと何かが潰れる嫌な音、夫の怒声。
しばらくしてローチの体液まみれのネイトが扉を開けてリジーの前に現れた。
「あなた……」
「もう大丈夫だ……ついてきて」
「ええ、ありがとう……」
「いいって事よ……」
ネイト達は通路を進み、監督官の部屋に入った。
部屋には科学者の白骨死体。ネイト達は足を止めた。
「……死体があるが、とりあえずこの部屋にはローチは居ないみたいだ…何か役立つ物

がないか手分けして……」
　ネイトが後ろのリジーに顔を向けると、彼女は鼻をつまみながら彼の話を聞いていた。
「リジー……何してんだ？」
「ゴメンナサイ……ホントに申し訳無いんだけど、貴方のニオイに耐えきれなくて。正確には貴方の体についたローチのニオイにね」
　リジーは涙目になりながらネイトにそう言った。ネイトから漂うローチの匂いに彼女は窒息寸前だった。
「そうか……手分けして役立つ物を探すぞ」
「ゴメンナサイ……」
　ネイトは部屋の奥を調べに行った。
　リジーはテーブルに置いてあるターミナルを調べ始めた。
「リジー！　シャワーがあった！　これでニオイとおさらばできるぞ」部屋の奥からネイトの喜ぶ声が聞こえた。
「それは良かったわね」リジーはキーボードを操作しながら微笑んだ。
　彼女は監督官の日誌やレポートを読み、ＶＡＵＬＴの計画を理解した。……自分達は騙されていたのだと。

【脱出トンネルを開く】

リジーはターミナルを操作し非常ドアの開閉コマンドを発見した。リジーはキーボードをカタンと叩き、非常ドアの開閉コマンドを実行する。

すると彼女の前のドアが音を立てて開いた。

「やった！」

――カサカサ。

リジーが喜んだのもつかの間、ドアの奥からローチが数匹ゆっくり部屋の中へと入ってきた。

「嘘でしょ……」

リジーは部屋の隅の倉庫内へと後退する。ネイトを呼ぼうとするが恐怖で声が出ない。彼女はその場に座り込んでしまった。

――カサカサ。

彼女に気づいたローチがリジーの元に近づいてきた。

「ネ……イ……ト」

恐怖で声が出せなくなったリジーは必死に周りを見渡した。

するとそばに１０ＭＭピストルが一丁転がっているのを彼女は見つけた。

……手を伸ばせばギリギリ届く距離である。

「えい！」
リジーはピストルの方向に身体を倒し、ピストルを手に取った。
彼女は迫り来るローチにピストルを乱射する。マガジンの弾を撃ち尽くすと、リジーは壁にもたれかかった。
ローチの残骸は床や壁にこべりついている。
「おい！　今の銃声は何だ！」
ネイトが何事かとシャワーを中断して監督官の私室から出てくきた。
彼はリジーが壁にもたれかかっているのを見つけ、彼女のそばに駆け寄った。彼の頭とジャンプスーツはびしょ濡れだ。
「大丈夫か！」
「ええ…あなた…私、ローチをやっつけたわ、ほら」
リジーはローチの残骸を指差した。
ネイトは死骸を確認すると、驚いた表情でリジーを見た。
「全部、お前がやったのか？」
「ええ……バンバンってね……」リジーは銃を撃つ真似をして笑った。
「流石は俺の妻だ」リジーはネイトの手を掴み、立ち上がった。
「ふふ、あなたびしょ濡れね。風邪引くわよ？」

ネイトのびしょびしょに濡れたジャンプスーツを見て笑った。
「大丈夫さ。…それよりも俺も銃を持ちたい…流石にもう素手でローチと戦いたくないしな」
「それなら、きっとそのへんに…ほら!」リジーは棚の上に置かれていた同型のピストルをネイトに渡した。「はい」
「よし」
ネイトはピストルを受け取るとマガジンを外し中の弾数を確認した。
マガジンはフル装填されており、ネイトはマガジンをピストルに装填し直した。
「空のマガジンと銃弾の箱もここにあるわ…数十発はありそうよ」
そう言ってリジーは、ハンドガンのマガジンに弾を込めた。準備が整うと、二人は銃を手に構えた。

二人は先へと進んだ。次の部屋はネイト達がＶＡＵＬＴに入ってきて最初に訪れた部屋であり、彼らは出口が近い事を悟った。
「後少しで出口だ」
「ええ。…でも出口の扉は閉じられてるわ……」
「何処かにコンソールがあるはずだ、手分けして探そう」

ネイト達は手分けしてコンソールを探した。するとリジーは扉のそばで白骨死体を発見しその近くにある種の端末を発見する。
（これがコンソールね。……それにしてもまた白骨死体……何だか寒気がする）
「あなた！……こっちに来て」
「どうした」
リジーに呼ばれてネイトは彼女の元に急いで向かった。
「コンソールってこれの事じゃない？」
リジーは目の前の端末を指差した。
「その様だな」ネイトはコンソールをいじくった。「……さて、どれが扉を開けるボタンだ……」
「その防護ケースに守られたボタンがそうじゃないかしら？」リジーは透明のカバーに守られたボタンを指さした。「ほら」
「ああ、これか。カバーが邪魔だな」ネイトは防護ケースを叩いたが、ケースはびくともしない。「駄目だ…ヒビ一つ入らない……」
「困ったわね……」
リジーは白骨死体の方をふと見た。すると彼女はここに初めて来た時の光景を思い出した。

まるで映像を観てるかの様に鮮明な映像が脳内に流れた。目の前の白骨死体は自分達を案内したドクターだ。彼の腕に取り付けられたパーソナルコンピューターに視点が拡大する。

（きっと、これね）

リジーは白骨死体の腕にある端末を外し、手に取った。

「あなた……ちょっとどいて」

「……お前じゃこのケースは破れないぞ?」

「いいから任せて」

リジーはケースを壊そうとしているネイトを後ろに下がらせた。

彼女はコンソールの手前に移動すると、ＰＩＰ―ＢＯＹのケーブルを伸ばした。

「何だその手にはめてるのは?」

「ふふ、これが私達の”鍵”よ……多分ね」

リジーがケーブルをコンソールに挿すとあれほど硬かった防護ケースがあっさり開いた。

「やったわ!」

「よし!　じゃあボタンを押すぞ」

ドッグミート

「俺達の世界が……」
「そんな……神様」
　ＶＡＵＬＴ１１１から脱出したネイトとリジーは、荒れ果てた世界を目の当たりにして絶望した。木や草は枯れ、ＶＡＵＬＴエレベーターの周りには白骨死体の数々……。

（こんな荒れ果てているなんて……）
「……リジー、ここに居ても仕方がない。……家に帰るぞ」
「……ええ」
　リジーは立ち上がり、ネイトと共にサンクチュアリ・ヒルズへと向かった。
　途中、逃げ切れなかった住民の白骨死体のそばを通りかかると、リジーはなんとも言えない雰囲気を感じ取った。
　怒り、絶望、哀しみ。まるで死者が何かを伝えようとしてきてるみたいで、リジーはとても怯えた。
（何だかとても怖いし、悲しいわ……）

リジーは恐怖を抑え込み、夫と共にサンクチュアリ・ヒルズへと足を踏み入れた。
「……生き残っている人はいるかしら？」
「分からない」ネイトはそう言い、自宅を見つめた。「ん？　あれは……コズワースか？」
ネイトは荒れ果てた自宅の庭で枯れた草木の手入れをしているロボットを指差した。
「……え？　……あ、そうよ、貴方！　あれはコズワースに間違いないわ！」
（コズワース！　壊れてなかったのね！）
二人はＶＡＵＬＴから出て初めての朗報に微笑んだ。
「おい！　コズワース！」
「!!　その声は！」
ネイトが大声でコズワースを呼ぶと、コズワースは、ネイト達に駆け寄ってきた。
「何て事でしょう・・奥様に旦那様では無いですか！」
「ハハ。コズワース！　今でもちゃんと機能するか？」
「はい、旦那様。ゼネラルアトミック社の最高傑作のわたくしは、２００年経った現在でも正常に動作しております」
ネイトとリジーは顔を見合わせた。
「コズワース……貴方、今２００年経ったて言った？　何かの間違いでしょ？　だって……」

「いいえ、奥様。お二人方がｖａｕｌｔへ避難されてから実に２００年あまり経過しております……まぁ地球の自転などで多少の誤差はありましょうが」
　リジーは片手で頭を抱えた。「なんて事なの……２００年……」
「しっかりしろ、リジー……」
　ネイトはリジーの肩に手を回し、コズワースの方を見た。この状況を受け入れた訳では無いが悲観にくれていても仕方がない。
「コズワース……最近、人を見なかったか？　ショーンが誘拐されたんだ」
「ショーン坊っちゃんが誘拐?!　……ああ！何てことでしょう！　それは大変です！」
コズワースは視覚センサーの絞りを狭めた。「わたくしは、あいにく人を見ていませんが、この先にあるコンコードなら何か手掛かりがあるかもしれません！」
（コンコード……あそこにショーンの手掛かりがあるなら）
「……行きましょう、貴方！」
「ああ。……ありがとうコズワース、じゃあコンコードに行ってみるよ」
「はい。お二人とも、お気をつけて、私はここで銃後を守ります！」
　ネイトとリジーは、ショーンの手掛かりを求めてコンコードへと向かった。
「リジー、あそこのスタンドに立ち寄ろう。何か役に立ちそうな物が残っているかも」
　ネイトは橋を渡った先にあるガソリンスタンドを指さした。

「……それって盗みに入るってこと？」
「リジー。もう二百年経っているんだ。とっくに持ち主は死んでるさ。……法律と一緒にね。」
「……ええ、分かったわ」
ネイトとリジーはゆっくりとスタンドの敷地内に足を踏み入れた。
ネイトはハンドガンを構えてゆっくり建物に向けて前進し、リジーは彼の肩を左手で掴みながら後ろを歩いた。
〈ワン！〉
ネイトは鳴き声を聞くと、身を低くしてリジーの方を見た。「リジー、今の聞いたか？
……なにかいる」
「ええ　……犬の鳴き声かしら？」
「そのようだ」
ネイトとリジーは、犬の鳴き声がするガレージに向かった。
二人がガレージに入ると、そこには一匹のジャーマンシェパードがいた。
彼は二人の元に駆け寄って舌を出しながらリジーの前で止まった。
「ヨシヨシ！　良い子ね」
〈ワン！ワン！〉

リジーが頭を撫でると犬は、嬉しそうな鳴き声をあげた。
「まさか、二百年後の世界でも犬がいるなんてな。ほら、ワンコロ」
〈クゥーン?〉
ネイトは犬に手を伸ばしたが、犬は戸惑った表情でリジーを見た。
「彼は大丈夫よ、私の夫なの」
〈ワン!〉
リジーの言葉に安心したのか、犬はネイトにも舌を出して甘えた。彼はまるでリジーの言葉を理解できてるかの様だ。
「よしよし」リジーは犬を撫でながら、ネイトを見た。「ねえ、この子私達のペットにしない?　きっと役に立つわよ」
「そうだな」ネイトは頷いた。「何て名前にする?」
『ドッグミート』
何故かリジーは、その単語を強烈に頭の中に思い浮かべた。犬はリジーの顔をじっと見ていた。
(ドッグミート?)
〈ワン!〉
リジーの心のつぶやきに反応したみたいに犬は鳴き声をあげた。

「あ……ネイト？　ドックミートなんてどうかしら？」
　リジーは戸惑いながら言った。
　ネイトは眉をひそめて彼女の顔を見た。「ドックミート？　何でまたそんな名前を？」
「うーん……分からないけど、急に頭に浮かんだの。……ダメ？」リジーは可愛げがある笑みを浮かべた。
「フ……別にいいよ。……ふっ、ドックミートか。お前に子供の名前を決めさせなくて良かった。言っちゃ悪いけど、お前のネーミングセンスは絶望的だよ」
　ネイトの言葉にリジーも「私もそう思うわ」と言って笑った。
（本当にそう思うわ）
「じゃあ、行こうか」
「ええ」リジーは頷き、ドックミートに向かって手を叩いた。「ドックミート！　行くよ」

コンコード

ネイト達はスタンドを後にし、コンコードへと向かった。コンコードに着き、曲がり角に差し掛かった所で、ドックミートが低い唸り声を出した。それとほぼ同時に乾いた銃声が遠くから聴こえてきた。

「ドックミート……お座り」リジーが指示を出すとドックミートは唸り声をあげながら姿勢を低くした。「いい子ね」

「ドンパチやりやってるな……」

ネイトは建物の陰から頭を出し、銃撃戦の様子を探った。

銃撃戦はコンコードの自由博物館に立てこもる男と、建物を包囲する数人の男達の間で行われている様だ。

「あそこから覗いてる奴がいるぞ！」

男達の一人がネイトに気づき、彼に銃弾を浴びせてきた。「クソ！」ネイトは咄嗟に頭を引っ込め、男達が放った銃弾はレンガの壁に着弾した。

リジーは男達に向かって数発撃ち、相手の動きを抑え込んだ。

「貴方、大丈夫？」

「大丈夫だ……」
ネイトはそう言い、壁から身を乗り出して、男達に向かって発砲した。
リジーもネイトと共に銃撃に参加する。しかし、男達の火力の方が上だった。
男達の銃撃に、リジーとネイトは釘付けにされた。制圧射撃下では狙って撃つことも、動くことさえ満足にできない。
「クソ、駄目だ！　釘付けにされてる！　……おい、ドックミートは何処行った？」
「え？……あれ？　ドックミート？」
〈ワオーン！〉
「痛え!!」
敵の銃撃が止んだ。そして男の悲鳴が聴こえてきた。
ネイトが壁から覗くとドックミートが数人の男達に襲いかかっている所だった。
どうやらドックミートはゆっくり男達の側面に回り込んで、男達に飛びかかった様だ。
「よし！　リジー、いくぞ！」
「ええ！」
二人は急いで建物の壁から飛び出して、前へ詰めた。
男達はドックミートの襲撃で混乱しており、二人に射撃してくる者は1人もいなかっ

た。
十分に男達に近づくと二人は銃弾を素早く正確に男達の頭や胴体にお見舞いした。
たった数秒で男達は道端に転がる死体と化した。
軍経験者のネイト。
数年間所属したボストン警察、それからその後の危ない探偵業で銃の腕を鍛えたリジにとって、一旦攻撃の機会を得られれば技術も知識も劣っている略奪者達を打ち負かす事など簡単な事だった。
「おーい、ここだ！　バルコニーの上だ」
自由博物館のバルコニーに居る民兵帽を被った黒人の男が声をあげ、リジーとネイトは上を見上げた。
「入植者の一団がレイダーに追われ、二階に立て籠もってる。……助けに来てくれ」と言って彼はバルコニーから姿を消した。
「行っちゃった。……何者かしら」
「分からん……悪い奴じゃ無さそうだが……。どうする?」
「行ってみましょう……何かショーンの手掛かりを知っているかも知れないわ」
「そうだな」ネイトは頷き、銃のマガジンを取り替えた。「リジー　俺から離れるなよ」
「ええ」

助け

ネイトとリジー、それからドックミートは民兵帽を被った男を助ける為、自由博物館へと足を踏み入れた。

博物館の中では既に銃撃戦が始まっており、ネイト達は二階の男達に銃を乱射しながら右の部屋に駆け込んだ。

〈イングランドへ帰れ！うぬぼれども〉

部屋はボストン茶会事件を模した造りとなっており、ネイト達が先を進むにつれて録音された音声が大音量で流れた。

（２００年経っても音響機器が壊れてないとはね……。確か次のセリフは……）

〈代表なくして課税無し！〉

「”代表なくして課税無し!”　よし！合ってた！」

戦前、博物館に何度か行った事のあるリジーは自分の記憶力が確かな事に小さくガッツポーズした。

一人で前方を警戒していたネイトは後ろを振り返った。

「……楽しそうで何より。博物館を楽しむのもいいけど、そろそろ敵を警戒してくれる

と助かる」
「……わ、わかったわ」リジーは恥ずかしそうな笑みを浮かべ、頷いた。
「よし、いくぞ」
「ええ……。ドックミート、行くわよ」
〈ワン！〉
二階に一人、こちらに気づいていない。敵を確認すると、ネイト達は一斉に部屋の外に出た。
ネイトは二階に陣取っている男に発砲した。
彼の放った弾丸は男の頭に直撃。男は力なく倒れる。
それとほぼ同時に目の前の階段に立っていた男をドックミートが噛み殺し、ネイト達は区画を制圧した。
「二階に気を取られて、そいつに気が付かなかった……偉いぞ、ドックミート」
〈ワン！〉
リジーは微笑み、ドックミートの頭を撫でた。
「ふふっ　褒められて良かったわね。偉いわ」
〈ワンワン！〉
「よし、先に進むぞ」

「了解よ」
二人は銃の弾倉を交換し、次の部屋に進んだ。
「おい、さっさとずらかろうぜ」
部屋の中で男達の話し声が聞こえた。ネイトはリジーに小声で「静かに」と言い、リジーは無言で頷いた。
「ドックミート……ここは静かにね」
〈ワン!〉
「おい、そこにいるのは誰だ!」
「まずい!」
ドックミートの鳴き声に反応した男達はネイト達に銃を発砲し、ネイトとリジーは彼らに応戦した。
男達は崩れた壁に身を隠し、ネイト達も陳列棚に隠れながら男達に応戦した。
「クソ……これじゃキリがない」ネイトは弾倉を交換した。「グレネードさえ、あればな……」
「これでも喰らえ!」
リジーの足下に緑色の球が転がってきた。

彼女はそれを拾ってネイトに見せた。
「ねぇ貴方、こんなの転がってきたけど?」
「早く投げ返せ!　それは手榴弾だ!」
「嘘?!」リジーは咄嗟に男達に向かってグレネードを投げた。
グレネードは床に落ちる前に爆発し、二人の男は断末魔をあげる間もなく絶命した。
「ふぅ……危ない所だった」
「ごめんなさい……手榴弾なんて見た事無かったから……」
「良いって、結果オーライだ。……それより怪我は無いな?」
「ええ、大丈夫よ。ドックミート、貴方も大丈夫よね?」
〈ワン!〉
「よし、それじゃ行こうか」
ネイト達は崩れた壁の先へ進み、バルコニーがある部屋の扉の前まで移動した。
「開けてくれ、敵は全て片付けた」
「本当か?　……待ってろ、今開ける」
錠を外す音がしたあと扉が開いた。
部屋に入ると、ネイトとリジーは民兵帽を被った男性に出迎えられた。
「やれやれ、誰かは知らないが、タイミングが完璧だったな。私はプレストン・ガービー、

コモンウェルス・ミニッツメンだ」
（ミニッツメン？独立戦争の？……歴史オタクかしら？　私みたいな？　……とりあえず悪い人じゃ無さそうね）
「俺はネイト・アップルトン、そして彼女が俺の妻リジーだ」
「はじめまして、リジーです」
「宜しく……ご覧の通り、ここは少々混乱状態だ」
　ネイト達が部屋の周りを見ると、机にもたれ掛かって嘆いている男性や落ち着きが無い女性が目についた。
「確かに混乱状態だな……」ネイトが言った。
「ああ」プレストンはため息をついた。「一ヶ月前は二十人仲間がいた。それが今じゃ五人……酷い様さ」
「辛かったでしょうね……同情するわ」
「ありがとう。本当に気にかけてくれる人達との出会いに感謝しよう。コンコードに定住するのは良い考えだと思ってたんだが、それは間違いだったとレイダーに思い知らされた。……奴らはすぐにまたここを襲うだろう。……だが、一つ考えがある。……手を貸してくれないか？」
　ネイトとリジーは顔を見合わせた。

◇◇◇◇

「なるほど……パワーアーマーにミニガン。確かに良い考えだ……」
博物館の電源ユニットからパワーコアを拝借したネイトとリジーは博物館屋上の墜落したベルチバードの前に来ていた。
ネイトは錆びたT―45パワーアーマーに身を包み、ベルチバードの銃座からミニガンをもぎ取った。
「貴方、気をつけて……」
「ああ、任せろ。これを着れば無敵だ」
ネイトはリジーにそう言って屋上から飛降りた。
パワーアーマーが必ずしも無敵の兵器ではない事はアンカレッジで知っていたが、彼はそう言うことで妻そして自分を安心させたのだ。
彼が降りると、外ではミニガンとパイプピストルの銃撃音が鳴り響きだした。
リジーは夫を援護する為、敵の死体から頂いたハンティングライフルを手にバルコ

ニーへ向かった。
「お嬢ちゃん」
バルコニーの扉に手をかけた時、入植者の中の老女ママ・マーフィーがリジーに声を掛けてきた。
「貴女は優れた力を持ってるわね」
「え？　……なんです？」
「貴女には特別な力がある……私とは別の力が――」
「いい加減にしてよ！くだらない事ばかり言って！」
隣で落ち着かずにウロチョロしていたマーシ・ロングが怒鳴った。
「今のうち……」
リジーはマーシが金切り声をあげている間に外に出た。
外ではパワーアーマーを着たネイトがレイダー達と戦っていた。バルコニーでは、プレストンがレーザーマスケットで援護している。
リジーも夫を援護すべくライフルを構えた。
「それを扱えるのか？」プレストンは射撃を中断してリジーに聞いた。
「ええ、扱えるわ。ライフルはあまり得意じゃないけどね。昔、ベガスの射撃場で高スコアを出したの……腕が落ちてなきゃ良いけど」

「……ベガス？」
プレストンは顔をしかめた。
そんな彼に構わず、リジーはバリケードからネイトに向けてパイプマシンガンを連射しているレイダーに照準を合わせた。
「また、外した」
リジーの放った銃弾は全て壁や地面に命中した。
レイダーは結局、ネイトのミニガンによって肉の塊と化した。
レイダーを殲滅したネイトは、バルコニーのリジー達に向かって手を振り、リジーも彼にグッドポーズを返した。
「いやー実に……素早いコッキングだった」
プレストンは自分なりにリジーを最大限フォローした。
「……おかしいわね」リジーはプレストンを見た。「これでも２００メートル先の的に当てた事があるのよ？」
プレストンは鼻で笑った。「そうだろうな…」
「本当だって！　はぁ……きっとこの銃が悪いのね。でもネイトが無事に強奪者達をやっつけたようで何より――」
突然、前方で大きな音がし、プレストン達は音のした方向に視線を集中させた。遠く

の地面が膨張しているのを見つけ、リジーは叫んだ。
「貴方！　地面が盛り上がってるわ！　そこから離れて！」
「分かった！　今――」
〈ヴォォォォ――〉
大きな音ともに巨大な怪物が地面から姿を現し、ネイトに襲いかかった。
ネイトは咄嗟にミニガンを構えたが、銃身の回転が始まる前にデスクローは彼に掴みかかり、ネイトを地面に押し倒した。
「クソ！　デスクローだ！逃げろ！」
「貴方！」
リジーは薬莢を排出し、次弾を薬室に押し込んだ。
彼女はアイアンサイトを覗き、夫を襲っている怪物に照準を合わせる。
〈ヴォォォォ〉
「うおおお！」
デスクローはネイトの顔面で獲物を仕留める前の雄叫びをあげ、ネイトもデスクローに負けじと決死の叫びをあげた。
そしてデスクローが右手を振り上げ、ネイトが覚悟を決めたその時。デスクローの右目に大きな風穴が空いた。

デスクローは目を押さえながら体をひねった後、大きな音を立ててネイトの横に倒れこんだ。
「……わーお」
「デスクローを一発でやったのか!?　信じられん！」
プレストンは、たった一発で連邦最悪の捕食者デスクローを仕留めたリジーを驚いた様な表情で見た。
「い、言ったでしょ?　ベガスで的に当てた事があるって……」リジーは戸惑いながらそう言い、バルコニーを後にした。「わーお……」
ネイト達は、プレストン達との話し合いの結果、サンクチュアリへと彼らを案内する事になった。ネイトとリジーが２００年前の人間だという事を明かすと、プレストンは驚きつつも2人の話を信じ、仲間だと認めた。
自由博物館から出たプレストン一行はサンクチュアリ目指して歩を進め、リジーとネイト、そしてドックミートが彼らを先導した。
「そういえば、一つ貴方に質問があるんだけど」
プレストンが「どうぞ」と言うと、リジーは後ろのロング夫妻を見た。
「あの二人はどうして……その……あんな感じなの?　何か話しづらかったわ」
プレストンは小さなため息をついた。「あの二人は息子をクインシーで失った……可

哀想な人達だよ。俺達も彼らを励ましてきたが……こればっかりは中々な……」
「あ……そうだったの……何だか私達に似てるわね」
「そうだな……俺達も息子を目の前で殺されたら彼らみたいになってたかも知れない」
「そうね……間違いなくなってたわ。……息子は無事でいるかしら」
「……息子さんはショーンとか言ったな？」
「ああ、そうだ」と、ネイトがプレストンに答えた。
「俺がこんな事言っても励ましにはならないかも知れないが……お前達の息子さんはきっと無事に見つかると思うよ。だから元気を出すんだ」
「ありがとう……プレストン。そうするわ」
「……ありがとう」
「どういたしまして」
リジーとネイトに礼を言われたプレストンは民兵帽をクイッとあげて微笑んだ。

前を向いて

プレストン一行は道を進み、サンクチュアリの橋の前に到達した。
「後、少しでサンクチュアリだ」
ネイトの言葉をプレストンが復唱して、後ろの者達に伝え、彼らは橋をゆっくりと渡った。
橋を渡り終えると、プレストン達はネイト達の家の向かいに座り込んだ。
彼等は久しぶりの落ち着いた休息を過ごした。
コズワースもプレストン達を歓迎し、サンクチュアリに再び活気が戻った。
「”我が家”に着いた感想はどう?」リジーは作業台の脇に座り込んでいるプレストンに聞いた。
「悪くない。……思えば今まで落ち着いて休める場所には恵まれなかったからな」
「ああ、だけど、ここを本当の意味で”我が家”と呼ぶには寝床と、食料、水が不足してるな」
プレストンの横に座っている髪が特徴的な男性、スタージェスが口を挟んだ。
「確かに、ただ寝床はどうにか工夫するとして食料と水はどうやって調達すれば?」

「旦那様！　私の浄水能力できれいな水が作り出せます！」
コズワースが嬉しそうに言った。
「ちょっとそれじゃ、足りないな」
スタージェスが言った。彼の言葉にコズワースは視覚センサーの絞りを狭くした。
「一日に数杯レベルの浄水装置じゃなく、もっと大規模な浄水装置か地下水脈を掘り当てて井戸を立てるか何かしないと」
「でも、サンクチュアリに地下水脈なんて……――」
「坊や達、ちょっとこっちへおいで」
リジーの言葉を遮ってママ・マーフィーが突然立ち上がり家の裏に向かった。
「ママ・マーフィー？」
プレストン達は不思議に思いながらも彼女の後に続いた。
マーフィーは庭の地面を数回踏んだ。「ここを掘ってみな。そうすればきっと水が湧き出るさ」
「……どうして分かるんだ？」ネイトが質問した。
マーフィーはネイトの方を向き、「サイトが教えてくれたのさ」と答えた。
ネイトとリジーは顔を見合わせ、首をひねった。
そしてリジーはプレストンの方に顔を向けら「サイトって何？」と目で訴えた。

「ママ・マーフィーは不思議な力が使えるんだ。サイト、彼女は自分の力をそう呼んでいる」プレストンはそう言った後、ママ・マーフィーの方に顔を向けた。「サイトを使うのにまた薬を使ったのか？　ダメだと言ったはずだ。……死んでしまうぞ？」
「しープレストン。人は皆いつか死ぬ‥それに私達にはサイトが必要なんだ。……いいから私の言うとおり、ここを掘るんだ」
「またサイト……もう沢山！」
マーシー・ロングはそう癇癪を起こし、家へと戻っていてしまった。彼女の夫のジュンも皆に申し訳無さそうな顔をした後、マーシーの後を追った。
ネイトとリジーは顔を見合わせた。
『彼女の言ってる事は本当よ。信用していいわ』
リジーの頭の中で義母の声が聞こえ、リジーは「……信じてみましょう」とネイトに言った。
ママ・マーフィーの言うとおり、ローザの家の裏庭を掘ると、大量の水が噴き出した。ネイト達は直ぐに井戸を作り、復興への第一歩を皆で喜びあった。
皆が喜びあっている中、マーシー・ロングは石垣に座り、一人寂しく配給された水を飲んでいた。
「何が復興への第一歩よ……バカみたい……」

彼女が愚痴を言いながら月に照らされた川を眺めていると、マーシーの隣にパーティーを抜け出してきたリジーが座った。
「よいしょっと」
マーシーはリジーを睨む様に見た。「……何しに来たの？」
「いやー何か女同士で話したいなって思って」
「フン……私は貴女と話したくない」マーシーは冷たい口調でリジーに返した。
リジーは地面に落ちていた石を拾い、川に投げ入れた。暗闇から石がポトンと水面をバウンドする音が二回聞こえた。
「あー二回か……腕おちたなぁ」リジーは悔しそうに笑った。
「バカみたい」マーシーはリジーから顔を反らし、水を一口飲んだ。「……貴女もみんなもバカだわ。少し前までは、生きるか死ぬかの瀬戸際だったのにあんなにはしゃいじゃってさ……」
マーシーはローザの家に集まっているネイト達の方に顔を向けた。
「……ジュンもカイルの事を忘れたかの様に皆と集まってるし……」
「……カイルって息子さん？」リジーが聞くと、マーシーは静かに頷いた。「ああ……プレストンさんから貴女達の息子さんに起きた事を聞いたわ。辛かったでしょう……貴女の気持ち分かるわ」

マーシーはリジーを睨んだ。「やめてよ！貴女に息子を失った私の気持ちなんてわかるはず無いわ！貴女は……」マーシーはハッとした表情をし、顔を下に向けた。リジーはマーシーから少し顔を背け、苦笑いした。「……ああ、貴女も息子を誘拐されてるんだっけ」

「ええ……まぁね」

「……ごめん」

少しの沈黙の後、マーシーは顔を下に向けながら一言謝った。

「いいの……」

「私ったら何やってんだろう……」マーシーはポケットからタバコを取り出し、ライターで火をつけた。「……吸う？」マーシーはリジーにタバコを差し出し、リジーは首を横に振った。

「ううん……私は吸わないから」

「……そう」マーシーは頷くと、タバコを吸った。

ため息が混じりに煙を口から吐き出すと、彼女は自分達の事をリジーに話し始めた。

「前はこんなんじゃ無かったのに……あの子が目の前で殺されてからジュンは常に何かに怯え、気弱になり、私は怒りを周囲にぶつける様になったの。……みんなが私達を気遣ってくれる度に私は恨み言を吐き続けた……自分でも理不尽な事だとは分かってい

るのについつい相手に辛く当たってしまう……はぁ」マーシーはタバコを吸い、先ほどよりも深く煙を吐いた。「……みんな、きっと私の事をクソ女と思ってるでしょうね」

リジーは首を横に振った。「……そんな事ないわ。貴女がみんなに色々辛く当たってしまうのはカイル君の事を愛していたからでしょう?」

「……ええ」

「でしょう?貴女は立派な母親だわ。クソ女なんかじゃなくね。貴女と出会ってまだ日が浅い私が貴女の事をそう感じたって事は他の皆もそう思ってるって事よ。……誰も貴女の事をクソ女とは思ってない、むしろ貴女の力になりたいって思ってるはずよ」

「フ……貴女、優しいのね」

マーシーは少し微笑んでリジーの顔を見た。

リジーは初めて見るマーシーの微笑みに驚きつつも、彼女に笑みを返した。

「……カイルは今の私達を見てどう思ってるんだろう……きっと駄目な親だと怒ってるんでしょうね……」

リジーはマーシーの肩に優しく手を当てた。

「そんな事ないわ……きっと嬉しく思ってるはず。こんなにも愛されてるんですもの、カイル君は貴女達の事を何時も見守ってるわ」

リジーの言葉は不思議とマーシーの心の奥に伝わり、マーシーはリジーの言葉を素直

に聞くことができた。
　まるでカイルがマーシーに語りかけている時の様に……。
「だから貴女も前を向いて歩かないと。……カイル君が見てると思ってさ、ね？」
「でも、前に中々進めないのよ……」
「大丈夫。ゆっくり確実に自分のペースで進めばいいよ、マーシー。……みんながサポートするから」
　〝ゆっくり確実に自分のペース〟これは生前のカイルにマーシーが何時も言っていた言葉だった。マーシーは驚いた表情でリジーを見たあと、涙を流し、咄嗟に手で拭いた。
「マーシー……？」
「ごめん……馬鹿みたいだけど貴女の言葉を聞いてるとまるでカイルが私に語りかけている様に思えて……ああ……もう」
　マーシーは涙を堪えきれず彼女の目からはポタポタと大粒の涙が流れた。
　リジーは優しく笑って、マーシーの背中に手を回した。マーシーは泣き止むと、リジーに「貴女の息子が見つかるように祈ってるわ」と言った。
「ありがとう」リジーは笑顔でマーシーにそう返し、２人はそれぞれ家族の元に戻った。
　ネイトとリジーは自宅だった場所に戻り、寝室だった場所にマットを敷いて共に寝

た。

一方マーシーはその日の夜、夫婦間でタブーだったカイルの話題をジュンに切り出し、2人で悲しみを乗り越えて行こうとジュンに言った。カイルの話題を出され、狼狽えたジュンであったが、マーシーの優しく強い説得によって、ジュンも夫婦の問題から逃げず、ゆっくり確実に自分達のペースで悲しみを乗り越えて行こうと誓うのであった。

息子を殺され、悲しみに沈み、不貞腐れた夫婦の姿はもう何処にも無かった。

「私達ならきっと乗り越えられるよ、ジュン」

そう微笑んで、マーシーは愛情一杯のキスをした。

遺した者、残された者

翌日、入植者達はプレストンに呼び出され、サンクチュアリの食糧事情について説明を受けた。

命の水を得たサンクチュアリ入植団であったが、食糧は尽きかけていた。至急にまとまった食糧を確保し、今後のサンクチュアリでの生活の為に自給手段を見つける必要があった。

第一回サンクチュアリ会議は熱い議論が交わされ、会議中幾つか下記の様な提案が参加者達からなされた。

1……ボストン市街にある球場を利用した街『ダイヤモンド・シティー』と交易し、食糧と自給の為の作物を調達する案。問題点としては単純に距離が遠い事と、レイダーの勢力圏を通過せねばならない事である。現在、サンクチュアリでまともに戦える者はネイトとプレストンしかおらず、この案は余りに無謀な物であった。

2……ここから近い戦前の連邦食糧備蓄庫を探索し、食糧を確保する案。戦前の知識を持つネイトとリジーが提案したこの案だが、既に備蓄庫はトゥーレット姉妹率いるレイダー団に占拠されており、食糧の確保はおろか近づくのも容易では無いことから却下

された。

3……そして3番目に出された案として、サンクチュアリから近い所にあると言われている鉄塔を利用したアバナシー農園と協力関係を築き、作物をいくつか分けてもらえる様に交渉する案。満場一致でこの案が採択された。

スタージェス、ママ・マーフィー、コズワース、マーシーロングがサンクチュアリを守り、農場の準備をする一方、残りのメンバー四人はアバナシー農園に向かうべくサンクチュアリを出発した。

ハンティングライフルで武装したサンクチュアリ隊は軍務経験があるネイトとプレストンを先頭に荒野を進んだ。

ある程度、荒野を進むと前方に大きな建物と柵に囲まれた農園が確認できた。

ネイトはハンティングライフルのスコープで農園を偵察する。

農園には頭が二つある牛が1頭と、農場を耕している三人の男女が確認できた。

「何が見える?」ネイトの横でプレストンが聞いた。

「……農作物とそれを耕す人間が3人ほど……それに頭が2つある牛も」

ネイトはスコープを覗きながら、そうプレストンに報告した。

「頭が2つある牛?」プレストンの後ろで夫の報告を聞いたリジーが思わず聞き返した。

「……それって普通なの？」
プレストンは頷いた。「ああ、普通だ。彼等はバラモンって呼ばれていて農民やキャラバン達の大切な家畜だ。味も悪くない」そう言うとプレストンはニヤッと笑った。
「匂いは最悪だがな」
「そうなんだ……」
リジーはこの世界はホントに奇妙な事で溢れていると実感しながら頷いた。
その後、リジー達は農場主と話し合いをする為、農園へと近づいた。
しかし、彼女達が農場の囲いに近づき、男に声を掛けようとすると、男は空めがけて威嚇射撃し、リジー達に銃を向けた。
四人は手を上げ、敵意が無い事を農民に示した。

◇◇◇◇

「すまんかったな」
農民の誤解を解いたリジー達は、話し合いの為、彼等と昼食を共にする事にした。

農民達の性はアバナシーといい、家長ブレイク、妻コニー、娘ルシーの3人で農業を営んでいるらしい。

コニーが料理を作っている間、ネイト、プレストン、ジュンの3人は農業の手伝いに出掛けた。残されたリジーは家屋の屋上で椅子に腰掛けながら、ハンティングライフル片手に夫達を静かに見守っていた。

農作業中に襲われたら対処ができない事をプレストン達は危惧し、リジーが監視役として家に残ったのだった。

外は平和そのもので、彼女は静かで心地よい時間と、涼しく優しい風を味わっていた。

「ここはとても静かで良い場所ね……」

「でしょ?」

リジーの独り言に答える声がした。リジーが振り返ると、優しそうな顔の女性が後ろに立っていた。

彼女はリジーに微笑んだ。

「この場所は私のお気に入りなの」女はそう言って、リジーの隣に座った。「はじめまして、私はメアリー・アバナシー。ブレイクとコニーの娘よ」

「ああ、宜しく。私はリジー・アップルトン」リジーは笑みを浮かべた。「ブレイクさん達にもう一人娘さんがいるなんて思わなかったわ。何処かに出掛けてたの?」

「うん、私はここにたまにしか帰らないの」
「別の場合で一人暮らししてるの？」
「まぁ、そうなるかな」
「ここから遠い場所？」
「ちょっとだけね」人差し指と親指で小さなCを作り、メアリーは微笑んだ。「遠いけど近いって言った方が正しいのかもしれない。家族と心で繋がってるからどんな道も私にとっては近道なの」
「ふふっ　家族を愛してるのね」
「ええ、とても。私にとっては家族の健康と平和が何より大切。だから……――」
「リジーさん、支度ができたから皆を呼んで」
下からコニーの声がした。
リジーは「わかりました」と答え、ネイト達に手を振った。「貴方達、食事の時間ができたわ！」
プレストン達は手を振り返すと、農作業を止めてゆっくりと家屋に向かって歩き出した。
「よし、私達もいきましょ、メア……――あれ？」
リジーが隣を見ると、メアリーは既に居なかった。

（きっと先に下におりたのね）

リジーはそう思い、下に降りた。

一階のテーブルにはトマトとポテトが合わさったテイトと呼ばれる作物を使った料理と、スイカのジュースが入ったコップが7人分置かれていた。

リジーは皆と席についたが、メアリーがいない事に気がついた。

（あれ……？）

「よし、じゃあ食事にしよう」

「あの」食事をし始めたブレイク達に、リジーが声を掛けた。「まだメアリーさんが席についてませんよ？」

「え？」

アバナシー一家は顔を見合わせ、ネイト達は「誰それ？」という目でリジーを見つめた。

「メアリーさんは何処にいったんです？」

「……なんでお前がメアリーの名前をしってるんだ？」

ブレイクは震えた声で言った。コニーとルーシーは神妙な表情でリジーを見つめている。

「なんでって、さっきまで話してたからですよ。彼女、家族想いで良い……――」

――ピシャン！

リジーの頬にコニーのビンタが飛び、ブレイクとルーシーは慌ててコニーを止めた。

「コニーやめなさい！」

「お母さん！」

「リジー、大丈夫か?!」

「ええ……大丈夫よ」リジーは瞳に涙を溜め、ネイトにそう答えた。

「メアリーと話した？　からかわないでよ！」

「か、からかうだなんて。……さっきまでメアリーさんと話してたんですよ？」

「話せる訳ないじゃない！　メアリーは死んでるんだから！」

希望

メアリーの墓に案内されたリジーは、「ごめんなさい」とコニーに謝った。「本当にからかうつもりじゃなかったの」

「もう、いいのよ」コニーはリジーの肩に手を置いた。「貴女は悪くないわ。私の方こそ、怒ったりしてごめんなさい……どうかしてたわ」そう言って彼女は、しばらく黙った後、口を開いた。「貴女……メアリーを本当に見たの?」

リジーはコニーを見上げた。「ええ。……彼女はブロンドでとても優しそうな顔でした」

「間違いない、メアリーだわ……」コニーは、隣にいるルーシーと顔を見合わせ、そう言った。「あの子は今も私たちの側にいるのよ……」と、彼女はルーシーの肩に顔を埋めて泣いた。

「……メアリーはなんて言ってました?」

ルーシーは母を受け止めながらリジーに聞いた。彼女の目には涙が溜まっている。

「家族の健康と平和が大切だと……どんなに遠く離れていても家族と心で繋がってるから私にとっては近道だと言ってました」

「そうですか。……メアリー、見守っててくれたんだね……」
　メアリーは涙を静かに流しながら言った。彼女に顔をうずめているコニーの泣き声が大きくなった。
「お母さん……家に戻ろう」そう言って、ルーシーはリジーに顔を向けた。「リジーさんも私達と一緒に」
「ええ」
『お母さん達が泣き虫でごめん』
　リジーが立ち上がると、メアリーの声がリジーの脳内に優しく響いた。
（いいのよ）
　リジーが墓を見つめてそう言うと、優しい風が彼女の髪をなびかせた。

◇◇◇◇

「俺達はお前たちミニッツメンに協力するよ」
「感謝する」

1時間後、アバナシー一家は新生ミニッツメンに協力する事を決め、ブレイクとプレストンは玄関前で握手した。
「メアリーの事を思い出させてくれて……彼女の存在を信じさせてくれてありがとう。お陰で俺達、家族は前を向くことができた」ブレイクはリジーにも握手を求め、リジーはそれに応えた。「全力でお前たちを支援するよ」
「ありがとうございます」リジーは感謝と敬意のこもった笑みをブレイク達に見せた。
「何か困った事があったら遠慮なく連絡してくれ、直ぐに我々が駆けつける」
「ああ、プレストン。そうさせてもらう」プレストンは民兵帽をクイッと被り直した。
「よし、それじゃ行こうか」
「ええ」
リジー達は、アバナシー農場を後にした。ネイトとジュンは沢山のテイトが入った籠を背負っている。リジーが後ろを振り返ると、ブレイク、ルーシー、コニー、それからメアリーの4人が手を振っていた。彼女はアバナシー一家に手を振り返すと、夫達と共に荒野を進んだ。
「俺も持とうか?」
「いや、いいよ。お前は前方を警戒してくれ。テイトは俺とジュンで運ぶ」そうネイトはプレストンに言い、ジュンの方に顔を向けた。「ジュン、重くないか?」

「だ、大丈夫だよ」
　ネイトは笑みを浮かべた。「よし。疲れたら遠慮なく言ってくれ、持ってやるから」
「うん、ありがとう」ジュンは礼を言うと、リジーに「それにしても、リジー……君は本当に死人の声が聞こえたり、姿が見えるのか？」と聞いた。
「ええ」と、リジーは頷いた。
「そうか。……それじゃ……――」
「できないわ、ジュン」リジーがジュンの言葉を遮った。「私は自由に能力を使える訳じゃないの。……だから貴方のお子さんの声を聞いてあげる事はできない……残念だけど」
「そ、そうか……ごめん」
「謝らないで。……私こそ、力になれなくてごめんなさい」
「い、いいんだ」
　ジュンが顔を下に落とすと、ネイトが彼を励ました。「元気だせ、〝相棒〟お前にはまだ守るべき家族があるじゃないか。……今は残された家族の事を最優先に考えようぜ」
「その通りだ、ジュン」プレストンがジュンの方を振り向いた。「幸せになる事。それがカイル君の供養になる」
「う、うん。頑張ってみるよ……ありがとう」

リジー達はジュンに微笑み、最大限の優しさを込めた言葉で彼を励ました。

◇◇◇◇

「それにしても、お前達夫婦には驚かされる。２００年前の住民と言ったかと思えば、まさか霊能力があるとは。……いつから見える様になったんだ？」プレストンが聞いた。
「小学からよ。……そのせいで、小学校では酷い目にあったけどね」
「酷い目に？」と、プレストン。
「うん」リジーは頷いた。
リジーは小学校時代、毎日の様にいじめられていた。主に女子からだ。不思議な能力を無邪気に喋りすぎたせいである。人は理解できない物を怖がるのだ。
こういった能力を持つものはクラスの人気者になるか、”異端者”としていじめられるかの二択しか無かった。それにリジーは周りの女子より可愛かったので、それもいじめの原因になった。
何時も彼女を助けたのが幼馴染みのネイトだった。彼はいじめっこ達を言葉で退か

せ、「行こう」と優しくリジーを彼女の家まで送るのだ。それが２人の日常だった。
ネイトと彼の家族は、リジーの話を信用し、ネイトの両親は実の娘の様に彼女を可愛がり、リジーの両親共に彼女を心無い人達から庇った。
リジーとネイトの間には絆が生まれ、それはいじめが無くなった中学でも続いた。
やがて、その絆は愛になり、２人は結婚したのだった。
リジーは昔の話を簡単にプレストンに聞かせた。
「虐げる者と虐げられる者か……２００年前も今とあまり変わらないんだな」リジーの話を聞いたプレストンは感傷的に言った。「ネイトは虐げられた者を守ったんだな。自分の奥さんを」
「ま、まぁな」ネイトは恥ずかしそうに笑った。リジーはそんな彼の肩に頭を寄せた。
プレストンは二人を見て微笑んだ。

第二章
再建への第一歩

サンクチュアリの食糧事情はアバナシー・ファームから提供されたテイトによって改善した。

少なくとも戦前の食べ物を見つける必要は無くなった。リジー達は土を耕し、手に入れたテイトの三分の一を種芋として植えた。

栽培が軌道に乗ればサンクチュアリは自給自足の体制を整えられるだろう。

ロング夫妻、スタージェスはテイト農園と居住地の整備を担当し、リジーとネイト、プレストンは戦闘班としてサンクチュアリの守備と周辺探索を担当することになった。

アバナシー・ファームとの連絡手段はアマチュア無線。救援の際にはリジーら三人がアバナシーの元に駆けつけ、逆の場合はコニーとブレイクがサンクチュアリに来てくれることになっている。

貧弱な相互防衛だ。無いよりはマシだろうが、やはり心もとない。

ネイト達は将来を考え、人手を募る事にした。リジーとネイト達は崩壊寸前の自宅を改造し、簡単な放送局を築いた。

「録音開始まで三……二……一」

スタージェスの手が下がり、リジーはマイクに口を近づける。

「連邦の住民にお知らせします。こちらはサンクチュアリ。私達と一緒に安全に住める場所を築きませんか？　皆さんが協力してくれれば連邦をより良い場所に変える事が出来ます。理想の未来を共に築きましょう。場所はサンクチュアリ。コンコード近く、レッドロケットと古びた橋を越えた先です――連邦の自由と安全を願う同志諸君。私達と共に連邦の人々と未来を守りませんか？　もし、連邦の為に武器を取る覚悟があるなら、是非サンクチュアリに来てください。ミニッツメンはあなたを歓迎します。場所はサンクチュアリ。コンコード近く、レッドロケットと古びた橋を越えた先です」

スタージェスはオーケサインを出して、録音機器のスイッチを切った。

短く安堵のため息を吐くリジー。「完璧だったよ」夫の言葉にリジーは笑みを浮かべた。

「ありがとう。何とか噛まずに言えたわ。……もっと張りがあった方が良かったかもだけど」

「いいや、上出来だ。大したものだよ」プレストンが言った。「さっそく君の声を流そう。

理想を求める人々に届くように」と、スタージェスの方を向く。「できたか？」
「ああ、今電波を流したよ。バッチリだ」
「よし」

リジーの声と博物館から拝借した戦前の愛国曲・行進曲は電波に乗って連邦の空を漂った。
放棄された車のカーステレオ、アマチュア無線、携帯式のラジオ。受信範囲は狭かったが、リジーの声は確実に人々の耳に届いた。

最初にやってきたのは、マーシーが恐れていたレイダー達ではなく、入植者の一団だった。
エミリーにジョン。西海岸育ちで元ミニッツメンのカップルに率いられた入植者の一団をネイト達はサンクチュアリに迎え入れた。
エミリーとジョンはプレストンの再入隊の要請を快く承諾した。クインシーの虐殺の前、理念を忘れた組織を見限った二人はミニッツメンを離脱し、自分達のできる範囲で人々を守ってきたという。正に新生ミニッツメンにふさわしい人材だ。
「これは始まりに過ぎない」マーシーに農作業の指示を受ける入植者達と、リジーと雑談

するカップルを見てプレストンは呟いた。
「希望への第一歩だ。……お前たちと出会えなければ踏み出せなかっただろう」ネイトにそう言うと、彼は一滴の涙を流した。
クインシーからの苦難を乗り越えた男の涙だ。

団結か死か

放送のお陰で、サンクチュアリの人口は十五名程に増え、テンパイズや他の入植地とも連絡が取れた。

彼らは新生ミニッツメンの理念に賛同し、ネイト達に協力を申し出た。

余裕のある入植地は作物をミニッツメンに提供し、求められれば入植者の何人かを新生ミニッツメンの民兵として送り込む事を誓った。そして立地も食糧事情も最悪な入植地に住む人々はサンクチュアリに移住することを決断し、彼らの何人かは新生ミニッツメンに入隊した。

パイプライフル、ハンティングライフル、ピストルにショットガン、はたまた前装式のマスケット。入植者の手にする武器は実に様々であった。

今は無理でもいずれは装備を統一させる必要がある。

ネイトはプレストンに新生ミニッツメン初代将軍に推薦された。

サンクチュアリ民兵隊の直接指揮はもちろん、彼は各地から召集した民兵隊の指揮も執ることとなった。

サンクチュアリ民兵隊の訓練と将軍不在時の指揮は旧ミニッツメン時代に軍曹を努めたプレストンの役目となった。

入隊した新兵は狩人や自衛の為に銃の腕を磨いた農民であり、真の兵士とは言い難かった。居住地を防衛するだけなら申し分なくとも、新生ミニッツメンがかつてのミニッツメンの様になるには規律と士気を鍛える必要がある。

プレストンは農作業の合間に新兵を訓練し、演習に励んだ。

起床前、食事中、夜中。プレストンとネイトらは時間を選ばず、緊急訓練を実施した。召集をかけられると、新兵達は急いで武器を抱えて各地の居住地へ急行するのだ。

新兵にとっては嫌な訓練だが、必要不可欠な訓練である。

いざという時に準備に遅れ、救援に間に合わない事態に陥れば、新生ミニッツメンの信頼は地に落ちるだろう。そのような事は避けなければならない。

訓練のお陰で新兵達はみるみる成長した。

ジョンとエミリーは分隊長として部隊を指揮し、訓練から二週間後に起きた最初の襲撃、スターライト・ドライブインの戦いを乗り切った。

スターライト・ドライブインの入植者達と後から駆けつけたミニッツメンは、レイ

ダーの集団を完璧に打ちのめし、撃退した。

リジーも愛する夫と共に戦闘に参加し、皆と勝利を分かち合った。

メアリーやカイルも姿を現した。二人はリジーの隣で善人たちの勝利を喜ぶのであった。

リジー以外の誰の目にも見えない存在であったが、確かに彼女達はそこにいたのである。遺した姉や父の側、悲しみから立ち直った父親の隣に。

◆◆◆◆◆

居住地の連携は直ぐにレイダー達を苦しめた。

居住地を襲いに向かった襲撃隊は武器を向けられるか手強い抵抗にあって追い返され、レイダーのボス達は好ましくない状況の変化に危機感を募らせた。

「レッドトウレットとタワートムに使者を送れ！」ジャレッドは唸った。「舐めきったふざけた野郎どもを潰す必要がある……徹底的にな」

ジャレッドの号令にレイダーの各勢力は応え、〝軍隊〟を差し向けた。大規模な戦力

を選たジャレッドはサンクチュアリへの総攻撃を決断し、実行に移した。
――ミニツツメンもこれで終わりだ。
勝利の自信に満ちたジャレッド。
しかし、彼は知らなかった。
戦闘の勝敗を決めるのは数ではなく、日頃の団結力と士気の高さだということを。

「レッド・トゥーレットとタワートムの奴らが引き返した?!」
コンコードの博物館に陣を構え、戦いの成り行きを見守っていたジャレッド。スターライト・ドライブインの入植者達を北へと追いやり、サンクチュアリへの総攻撃を指揮していた彼は思わぬ報告に驚いた。
「一体何があった?!」
「わかりやせん、ボス！　……ただレッド・トゥーレットの手下が引き上げると、タワートムの奴らも下がってしまいやした！」
「あいつら……」
〝盟友〟の勝手な行動にジャレッドは憤怒した。
この時点のジャレッドには知る由もなかったが、レッド・トゥーレットの撤退は彼女の本拠地がタワートムの別働隊の強襲を受けた事によるものだった。

アバナシー・ファームとｖａｕｌｔｌｌ１方面の攻撃を担当していた二つのレイダーが撤退したとなると、ジャレッドの作戦は崩壊したも同然だ。ただでさえオールドノースブリッジの前での戦闘は上手くいっていない。その状況で左翼の戦線が崩れたとあっては戦況はますます悪化の一途を辿る。

「お知らせしやす！　敵がダイナーを奪い返しました！」

「うおおお!!」

新しい報告にジャレッドの怒りは頂点に達した。彼はショットガンの引き金を引き、怒りを部下にぶつける。肉片と化した仲間を見てヤク中の男女は震え上がった。

「どいつもこいつも使えねえ!!」

部下の使えなさと敵の反撃にジャレッドは怒り狂った。

敵左翼の空白に気づいたミニッツメンはアバナシーファームとｖａｕｌｔ周辺に展開させていた守備部隊に反撃を命令、コンコードを占拠していたジャレッドの部下達が対応するよりも先にダイナーを奪い返したのだった。

ドラムリン・ダイナーが奪還されたということは、コンコードはおろかレキシントンやコルベカが危ない。もはや作戦の継続は不可能だった。

「畜生！　引き上げだ!!　コルベカまで引くぞ！」ジャレッドはヌカコーラの瓶を床に叩きつけた。「クソッタレ!!」

◇◇◇◇

レイダーの主力部隊が撤退を始めると、ネイトは追撃戦を命じた。サンクチュアリ隊はネイトとリジーに率いられ、レッドロケットを奪還。そのままの勢いでコンコードに攻め入った。

アバナシーファームからダイナーまで進出した部隊はコンコードを包囲することなく、ネイトの指示通り防御に徹した。

臆病な動物も逃げ場を失えば牙を向ける。ネイトは追い詰められた敵の怖さをアンカレッジで充分に体験していたため、相手に逃げ道を与えた。

「畜生!!　後退だ!!」

「おい！　置いてかないでくれ!!」

コンコードのレイダーは波に飲まれる砂の城のように崩壊し、コルベカへと引き返していった。

「斥候の報告によると、レイダーは完全にコルベカに引き上げた様だ」プレストンが言っ

た。「大勝利だな」
「ああ、奇跡だ」ネイトは丘の上からコンコードを見下ろした。「アバナシー農場を攻撃していた敵が撤退しなければ我々は負けていたかもしれない。今回は敵の団結力の無さに救われた。……油断は禁物だ」

◇◇◇◇

「クソッ！」
レッドトゥーレットは激怒していた。本拠地が攻撃されているとの連絡を受け、ミニッツメンとの戦闘を切り上げて急いで救援に駆けつけたトゥーレットは、タワートムのレイダー団を食糧備蓄倉庫から追い出すことに成功した。食糧も人員も被害は少ない。が、レッドトゥーレットは何よりも大切なものを失った。妹のリリーだ。
――妹の命が惜しいなら要求に従え。
タワートムはリリーを誘拐し、食糧を渡すように要求してきた。すぐにでも血祭りにあげてやると憤怒するレッドであったが、妹が人質に取られている現状では手も足も出せない事も理解していた。

「クソッ！　クソッ！　クソ！」

頼れるリーダーの激怒ぶりに周りの部下たちは沈黙した。これまで彼女が部下を傷つけることはなかったが、今日下手な真似をしたら殺されるだろう。両親が死んで以来、必死に守ってきた妹が卑劣な男に誘拐され、レッドはいつもの冷静さを失っていた。

涙を隠すかの様に暴れ、自室をメチャクチャにするレッド。彼女はひとしきり暴れると、その場に座り込んだ。呆然とするリーダーを部下たちはただ見守る事しかできなかった。

状況

ジャレドは急速に影響力を失った。

盟友の独断を許し、仲間割れを阻止できなかった彼の威信は地に落ち、軍団は酷く傷ついた。毎日の様に薬を求めてやってくる中毒者がいるとはいえ、戦力の立て直しは難しい。薬は別として食糧が明らかに不足していた。

ミニッツメンが復活してから続いている問題だが、ジャレド達は入植地からの食糧強奪に苦労していた。

以前のような脅迫は効果が殆どなかった。後ろ盾を得た入植者は脅しに屈せず、攻撃すればミニッツメンと共に抵抗してくる。

厄介な事この上ない。

更に前回の戦闘で劣勢となった今では工場とレキシントンを維持するだけで精一杯で、とてもじゃないが食糧を奪う事はできない。

連邦食糧保管庫を拠点にしているトゥーレットの協力は望めない。彼女はタワートムとの問題で忙しく、妹の救出を拒否したジャレドを恨んでいる。八方塞がりだ。

老婆はこの事も予知していただろうか？　ジャレドは薬をキメながら思った。自分

も老婆の様な予知ができればこの状況を好転させる事ができる。
　彼はそう信じ、今日も大量の薬を消費するのであった。
「ボス、タワートムから使者が来ています」
「使者？　……なんのようだ？」
　ぼんやりとした意識の中でジャレドは尋ねた。
「分かりません。……追い返しますか？」
「ああ……いや、待て」ジャレドは直感を感じた。「使者と会おう。使者を通せ」

◇◇◇◇

　サンクチュアリ復興計画は予定通りに進んでいた。廃墟は解体され、家は屋根と壁を補修されてようやく雨風を凌げる様になった。ｖａｕｌｔｌｌｌは攻撃された際のシェルターとして利用され、収穫されたテイトや備品が集められた。
　作業分担も新たに割り当てられた。スタージェスは建設や解体作業のリーダーとして、ジュンは作物の責任者として入植者達をまとめている。少々、きつい言い方が玉に瑕だが、マーシーはスタージェスと同じく良くやっている。

ジュンは最近、ライフルの扱い方をネイトやプレストンから習い始めた。もうこれ以上家族は殺させない。彼の意志は固かった。

ネイトは将軍としてミニッツメンの指揮とサンクチュアリの管理をこなしている。目標はレキシントンからレイダーを追い出し、連邦北部を安定させることだが、まだミニッツメンは各入植地の民兵隊の集合体に過ぎない。防衛ではなく攻撃といったリスクの高い行動に各入植地のリーダーは難色を示していた。レイダーへの攻勢は、彼らにとって不要な戦いなのだ。

防衛ネットワークの加護への対価に人員や食糧、少量のキャップを提供してもらっている手前、無理強いはできない。

仕事の合間に訓練を受け、緊急時に武器を手に取る入植者だけでは足りない。サンクチュアリの民兵隊は自由に動かせるが、それだけではレイダーに勝利することはできない。

攻撃には本格的な訓練を施した常備軍が必要だ。かつてのミニッツメンよりも強い組織が。

リジーは夫を支えつつ、スカベンジャー隊を率いて物資を廃墟から回収する任務を引き受けた。外に出れば息子の行方の手がかりも何か掴めるかもしれない。全員が奮闘

している今、自分たちの息子の事を優先する事はできない。目の前の事に集中しなければ遠くにはたどり着けないのだ。

忍耐と希望を忘れずにリジーはネイトと共に連邦で生きていく事を誓ったのだ。